

しょうしんげ ぼんのうしょうげんすい ふけん だいひむけんじょうしょう が
正信偈の言葉より「煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」

昨年しんねんの報恩講でも、この言葉については少し触れたのですが、今回はもう少し詳しくお話したいと思いま
す。

『正信偈』(5頁下段右)「**極重悪人唯称仏 我亦在彼摄取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我**」

〈「**極重**の悪人はただ仏を称すべし。我もまた彼の摄取のなかにあれども、**煩惱眼**を障えて見たてま
つらずといえども、**大悲倦**きことなくして、常に我を照らしたもう」といへり。〉

(「極めて罪の重い悪人は、ただ念仏をするべきである。私(源信和尚)もまた、阿弥陀如来の光明の中
に掬め取られているけれども、**煩惱**がわたしの**眼**をさえぎって、その光明をみることができない。しかし
ながら、如来の大なる慈悲の光明は、そのようなわたしを見捨てることなく常に照らして下さる
と述べられた。)

悪人については後で詳しく触れますが、これは浄土真宗の七高僧のお一人である、源信僧都(和尚)につ
いて述べられた『正信偈』の一文です。

源信僧都はこれとよく似た文を『往生要集』中巻に書かれたのですが、親鸞聖人はそれを一部書き換えて、
『正信偈』に加えられました。

源信僧都は、浄土真宗の七高僧の、第六番目の高僧です。

七高僧：(①竜(龍)樹菩薩、②天親菩薩、③曇鸞大師、④道綽禪師、⑤善導大師、⑥源信和尚、⑦源空聖
人(法然))

七高僧は、インド、中国、日本の三国で浄土教の教えを受け継いで来られた高僧方です。

簡単に説明しますと、竜樹菩薩(『正信偈』3頁上段真ん中)はナーガールジュナ(Nāgārjuna)という名前
で、2~3世紀頃に活躍されたと伝えられ、南インドで大乘仏教を体系化したといわれる第一祖の高僧です。

「八宗の祖」ともいわれます。八宗とは、奈良・平安時代の八つの宗派で、**俱舍**(法相宗の付宗・寓宗、俱
舍論、東大寺・興福寺)・**成実**(三論宗の付宗・寓宗、成実論、元興寺・大安寺)・**律**(四分律、唐招提寺)・

法相（唯識、興福寺・薬師寺・法隆寺）・**三論**（中論・十二門論・百論、奈良時代の元興寺・東大寺南院、華嚴宗や真言宗に影響を与えた）・**華嚴**（東大寺、華嚴経）の**南都六宗**と、**天台**（比叡山延暦寺、最澄、法華経学、密教、戒律、禅）・**真言**（空海、高野山金剛峯寺、密教、古義・新義（覚鑿）、豊山派（長谷寺、護国寺）・智山派（京都・智積院、成田山新勝寺、川崎大師、高尾山薬王院））の**平安二宗**を指します。

竜樹菩薩は著書『十住毘婆沙論』の中で仏教を**易行道**と**難行道**とに分けられ、易行道である阿弥陀仏の本願による念仏を勧められました。

易行とは、難行に対する言葉で、称名や信心をもって浄土に往生して成仏しようとする方法のことです。

難行とは、数多くの戒律を保ち、禅定をし、善根を積んで、多くの困難な修行を長い間重ねて成仏しようとする方法です。この難行に対して、凡夫にも修行しやすいことから易行といえます。

『正信偈』3頁目上段左から2行目と一番左の行に、「顕示難行陸路苦 信楽易行水道楽」とありますが、これは、〈難行道は苦しい陸路のようであると示し、易行道は楽しい船旅のようであると、竜樹菩薩はお勧めになった〉という意味です。

第二祖の天親菩薩（3頁下段5行目）は、**5世紀**に北インド（現在のパキスタン・ペシャワール）で活躍され、名前を**ヴァスバンドウ**（vasubandhu）といえます。世親（新訳）とも言います。

『浄土論』を著わして、阿弥陀仏におまかせする**一心**の信心の大切さを教えられました。

『正信偈』3頁下段5行目の「天親菩薩造論説」の「論」とは、浄土論のことです。

一心とは、一心にもっぱら阿弥陀仏を心に念ずることを言います。

第三祖の曇鸞大師（4頁上段5行目）は、中国で**5～6世紀**に活躍され、天親菩薩の『浄土論』を注釈した『往生論註』（『浄土論註』）を著わして、**自力と他力**を説き、他力の道を勧められました。

『正信偈』4頁目上段左から4行目の「天親菩薩論註解」とは、この『往生論註』のことです。

第四祖の道綽禅師（4頁下段5行目）は、**6～7世紀**に中国で活躍されました。

中国・玄中寺の曇鸞大師の碑文を読んで浄土教に帰依し、『安楽集』を著わして、仏道に**聖道門**と**浄土門**との二つがあることを説き、浄土門を勧められました。

『正信偈』の「道綽決聖道難証 唯明浄土可通入」は、〈道綽禅師は、聖道門の教えによってさとするのは難

しく、ただ浄土門の教えによってのみさとりに至ることができる」と明らかにされた」という意味です。

第五祖は、やはり中国の善導大師（5頁上段1行目）で、7世紀に活躍されました。

玄中寺の道綽禅師に入門し、『観無量寿経』を注釈した『^{かんぎょうしよ}観経疏』を始めとする著書で知られます。

第六祖が、今回の源信和尚（5頁上段9行目）です。

奈良出身で、10～11世紀に、平安時代中期に活躍された天台宗のお坊さんで、『往生要集』という有名なお書きものを残されました。

京都の比叡山延暦寺にある^{よかわ}横川（境内＝東塔・西塔・横川）の恵心院に隠遁されたことから恵心僧都とも呼ばれ、985年に44歳で極楽往生に関する重要な文章を集めた仏教書である『往生要集』を著わされました。

この書は地獄や極楽に関する記述が有名で、中でも八大地獄（等活・^{こくじょう}黒縄・^{しゅごう}衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・^{むけん}大焦熱・無間（阿鼻））について詳しく説かれているところから、後の日本人に大きなショックを与え、絵説きが広められ、地獄の恐ろしさが当時や後世の人々に大きく広まりました。

源信和尚は、死後に極楽往生するには、一心に仏を想い、念仏の行をあげる以外に方法はないと説かれ、日本の浄土教の基礎を創られました。

また「厭離穢土・欣求浄土」を説き（徳川家康の^{うまじるし}馬印にも用いられた）、浄土には「真実の報土」と「方便の化土」とがあり、真実報土を願う者に本願称名を勧められました。

『正信偈』5頁上段左の「報化二土正弁立」はこのことです。報化とは報土と化土のふたつで、それを明らかに示された、という意味です。他力信心の人は報土に生れますが、自力信心の雑修の人は化土にしか生れない、と説かれたのです。

最後の第七祖が源空聖人（5頁下段5行目）こと、法然上人です。

親鸞聖人よりもちょうど40歳年上で、12～13世紀に活躍されました。

岡山出身で、上人が幼い頃に殺害された父親が、恨みをもって復讐してはならないと言い残して死んだことから、比叡山で出家し天台教学を学び、善導大師の『観経疏』によって専修念仏に帰依し、比叡山を下りて、京都の吉水で念仏の教えを広めました。

『選択本願念仏集』（『選択集』）を著わして、他力の念仏はただ阿弥陀仏の選択本願にあることを示されま

した。『正信偈』5頁下段左から5行目の「選択本願弘悪世」は、このことです。

法然上人は、親鸞聖人のお師匠さんです。親鸞聖人が吉水で法然上人から教えを受けたのは、わずか4年間ほどの間でしたが、その後の親鸞聖人が生きる道を決定づけられたのです。

さて、『正信偈』のこの文章を詠んだ和讃を、親鸞聖人は次のように書かれています。

こうそうわさん げんしんだいし
『高僧和讃』(源信大師)

「^{ごくあくじんじゅう}極悪深重の衆生は ^{た ほうべん}他の方便さらになし ^{ひとえに}ひとえに ^{みだ しょう}弥陀を称してぞ ^{じょうど}浄土にうまるとのべたもう」

(極めて罪の重い悪人である我々は、他の^{ぜんぎょう}善行や他の^{ぶつぼさつ}仏菩薩の^{ちから}力で^{すく}救われる方法はさらさない。

ただ^{みょうごう}弥陀の名号を^{とな}称えて、^{おほ}浄土に生れることができると仰せられる。)

一年ほど前に、悪と往生について少しお話しました。繰り返しになるかもしれませんが、私たちは、自分が悪人であるという意識を普通はなかなか持てません。

法律に違反することをしたり、倫理・道徳に反する悪人、こうした警察や裁判所にお世話になるような、世間一般で言うところの悪人ではなくても、仏様の眼から見れば、私たちは皆、煩惱を具えた凡夫であり、悪人なのです。

仏様の教えになかなか従えない人、真実に背く人、阿弥陀如来の本願を疑って逆らう人、それが「極重の悪人」なのです。

また毎日の食事で肉や魚、貝などを食べて、他の生き物の命を奪わないと自らの命をつなげない私たち。そしてよかれと思ってしたことがかえって相手の迷惑になってしまったり、何気なく発した一言が相手を傷つけてしまったり。人間である以上、どんな人にも必ず煩惱の心があり、完璧な人というのはいないので。現代の聖者の一人である、あのダライ・ラマでさえ、怒ることがあるといいます。

私たちは、ついつい自己中心的な執着心(我執)を起こしがちです。人間である以上は、どんな人も完璧な存在ではない悪人です。

そうした自分の本当の心の在り方に気づいた人のことを悪人といいます。

善人というのは本当の自分の姿やあり方を知らず、自分は善人であるとうぬぼれている人のことを言いま

す。本当の自分を知れば、自分も悪人であるということがわかってくるのです。

悪人とは、自分は善行を積むことはできないということに気づき、縁があればどのような悪を犯すかもしれない身であり、自らの力ではとても悟りを得ることはできないと気づかされて、阿弥陀如来の本願の働きにおまかせする人のことです。

そのような悪人でも、信心をもってお念仏を称えることによって、浄土往生が可能になるのです。

『歎異抄』に「善人なおもって往生をとぐ いわんや悪人をや」という有名な言葉があります。

『歎異抄』^{たんにしょう} 第三条 「^{ぜんにん}善人^{おうじょう}なおもって往生^{あくにん}をとぐ、いわんや悪人をや。」

(善人ですら救われるのなら、ましてや、悪人が救われないわけではない。)

普通は逆ですよ。これは「悪人正機」といいますが、阿弥陀仏の平等の慈悲を表す、浄土真宗の大事な教えのひとつです。

「正機」とは、めあて、対象という意味で、悪人こそが阿弥陀仏の救済の対象であるということです。

道徳的、法律的、社会的な意味での悪人ではなく、宗教的な意味の悪人、すなわち、自分の力で善行を積んで成仏することのできない者を悪人と言ったのです。

いわゆる善人、自分の力を信じ、自分のよい行いの見返りを疑わないような傲慢な人々は、阿弥陀仏の救済の主な対象ではないのです。

厳しい修行もできない煩惱具足の私には、阿弥陀如来の本願の他に救われる道はないと、親鸞聖人は御自身の体験を通して悟られたのです。

修行を積んで学問をすればするほど悟れないわが身、自分の罪悪性に気づかされた御自分を厳しく見つめられた末のお言葉です。

自分の力で善をなして修行を積んでさとりに至るという自力の心をひるがえして、阿弥陀如来の他力におまかせすることによって、私たち凡夫も救われるのです。

いいことをしたと善に誇っている善人よりも、深くわが身の悪を自覚した悪人こそが、弥陀にすがるしかない^と自覚できる人であり、往生の本当の目当てなのだ^と親鸞聖人は言われたのです。

また『尊号真像銘文』には、次のような文章があります。

『尊号真像銘文』末

「^{せつしゆふしや}「攝取不捨」の^{ねんぶつしゆじょうせつしゆふしや}ころを^{もん}あらわした^{しゃく}もう、「念仏衆生攝取不捨」の^{もん}文を^{しゃく}釋した^{もん}まえるなり。」

(すべてのものを^{おさ}と^す撮め取ってお捨てにならないという^{あみだぶつ}阿弥陀仏の^{じひ}慈悲の^{こころ}お心をあらわしておられるのであり、『^{かんむりょうじゆきょう}観無量寿経』に^と説かれている「^{ねんぶつしゆじょうせつしゆふしや}念仏衆生攝取不捨(念仏の衆生を^{ねんぶつ}攝取して^{しゆじょう}捨て^{せつしゆ}たまわす)の^い意味を^み源^{げん}信^{しん}和^わ尚^{しょう}は^と説^あき^あ明^あかして^いおい^いで^いにな^いると^あ知^ある^あが^あよ^あい^あという^あこと^あである。)

どのような悪人であっても、阿弥陀如来は「攝取不捨」のお心で、信心をもってお念仏を称える人を漏らさず救ってくださるのです。

今まで気づかなかったけれども、阿弥陀如来は常に慈悲の光を注いでくださっていたと、それが自分自身のことであったと気づいた時にこそ、「大悲無倦常照我」と言えるのでしょう。

このような凡夫は、早く自分へのこだわりや執着心から離れ、思い上がりを捨てて、ただ素直に「南無阿弥陀仏」と称えるしかないと、源信僧都は言われているのです。

そのような「極重の悪人」だからこそ必ず撮め取ってくださるのだと、源信僧都は私たちに励ましてくださっているのだと思います。

源信僧都は、私たちが如来の攝取の中にすでに身を置いているという事実と、煩惱によってその事実を見られていない現実とを直視なされました。

本願に撮め取られているという事実があるにもかかわらず、煩惱が眼のさまたげとなって攝取の光を見ることができない。

絶え間なくわき出る煩惱、自我執着心が心の眼を覆い尽くして、撮め取って捨てられることがないという本願を、自分自身で見えなくしてしまっていると言われたのです。

しかし、それでもなお、如来の大なる慈悲、哀れみの心は、あきらめることなく、常に御自分自身を照らして護ってくださっていることに、源信僧都はこの文章で感激しておられるのです。

源信僧都のお喜びが表明されているということで、親鸞聖人は、源信僧都のこのお言葉を『正信偈』に加え

られたのだと思われるのです。